

ウルトラフレンズ

水川リョウト

ネオフロンティアスペース。【ティガ】、【ダイナ】と呼ばれる【ウルトラマン】がいたのも今は昔。長らくは異星人や怪獣が現れても地球人の手で対応してきた。しかし段々と汎用的な一つの特捜チームでは対処できなくなってきていたTPCは三つの専門的な特捜チームを設立するSAG(Save the expert Ability Guard)計画を発令、役割を分け、対応力を高めた。その三つのチームを纏めたSAGに3人の若者が志願し、入隊する。その3人は、遠い昔の守護神、【ウルトラマン】へと姿を変える……！ ※これは作者が大昔に書いた作品のリメイクです・エヴリスタに投稿してましたがアカウントを無くしました。ので続きは完全にこちらのみとなります

目次

第一話	『俺達ウルトラフレンズだ!』
第二話	『正義と友情』
第三話	『三位一体』

第一話 『俺達ウルトラフレンズだ!』

ある日の朝、三人の男がとあるビルの前に並び立つ。学生の頃からの夢を心に秘め、その夢を叶えるために。

この物語は、三人の男の友情と戦いの物語である。

ウルトラフレンズ 第一話 『俺達ウルトラフレンズだ!』 暴力怪獣 ボリウ
登場

「受かったぜひゃっほーい！」

「試験に受かってビールがうまい！」

「はは、確かにね。でも、残念だったね。全員違う部隊だなんて」

ジョッキを左手に持ち、右手を高く振り上げた茶髪のロングヘアの青年は水野

ミズノ

光、^{ミツル}ホクホク顔でビールをゴキユゴキユ呑んでる赤髪の青年は^{ホームラッシュ}炎敦士、その二人をたしなめながらビールをチビチビ呑んでる黒髪の青年は^{キノヒロキ}木野裕樹。

彼らがこの物語の主人公である。

「ま、確かにな。オレがストリームス、敦士がアンデッツ、広樹がガードナイツ。綺麗に別れちゃったよな」

「でも、別支部にならなかつただけかもしれません。ヨーロッパとかどうやって休暇とっていいかわかんねえし」

「でも、日本が一番休暇とりにくいよ？ 労働基準法が一番甘いのは日本だし。ブラック企業って呼ばれてるところなんて海外じゃ法律違反ですぐ訴えられるらしいし」

しれっとした顔で木野は言い放ち、水野と炎はうげ、といった感じの表情で発言した本人を見た。

「……お前、おとなしそうな顔して中々に黒いよな」

「はは、光には及ばないよ」

「なんだどう!? こんな爽やか系イケメンを捕まえておきながら！」

水野は焼き鳥を摘まみながらその長い髪を靡かせ本人的には爽やかなイメージを醸し出す。しかし、センスが古い。

「見た目詐欺ってことだろ。お前、チャラそうな髪しときながら初心だし」

「いや、だからこの髪は地毛なんだって。生まれつき色素うすいのよ」

水野は自分の髪を掻きあげ、目を細める。

「……しゃべり方もチャラいくせに性格だけ初心とか狡いよな」

「好きでこんなしゃべりかたになったんじゃないーやい！ 親の影響なんだよ！」

「……どんな親さ」

水野の叫びに炎は思わず、といったように呟くと、木野が炎の耳を寄せた。

「敦士、光の親は光以上に見た目、喋り方と性格、能力の差が激しいの忘れたの？」

「……あー、そういえば『剣道の鬼』とか言われててそれくらい厳しいのを見た目二十台喋り方チャラチャラな不思議生物だったなこいつの親」

「親父に言いつけんぞコノヤロー」

「それだけのご勘弁を」

「僕達まだ死にたくないんで」

「ですよー☆」

水野の親父は、『ちゃらちゃらしていますが、それが若さの秘訣ですか?』と言われただけで記者を半殺しにした経験がある。要するに、『ちゃらちゃらしている』と言った時点でどうなるか分からないのだ。恐ろしすぎるにも程がある。そんな存在に告げ口されたらどうなるかなど考えたくもない。

「おい、オジサン、なに人のズボンにビールぶっ掛けてやガンだ!」

「え、ええ? き、君達が勝手に人のテーブルにぶつかってきたんじゃないか!」

「おーおー、このオジサンなつまいきー♪」

「殺っちゃう? 殺っちゃう?」

ふと聞こえた不愉快な台詞に、水野はそれまで楽しそうにしていた表情を消し、席から立ち上がる。

「……炎、木野。ちょっと、いってくる」

「一人じゃきついだろう。見たところ五人もいるみたいだし。お前3人、俺達1人ってことで……」

「俺の負担でけえ!? ま、いいっしょ。俺も、今日は携帯警棒持ってきてるし」

水野が懐から取り出したそれに、炎は眉を顰める。

「……なんでンなモン持ち歩いてんだよ」

「そういう敦士もエアガン二丁持ってきてるくせに」

「……何故分かる」

「長年の勘、って所カナ？」

「なにそれこわい」

木野が自分の鞆の膨らみを指しての台詞に炎がたじろぐ中、水野はスタスタと歩き出す。

「こらこらそこのお兄さん達ー♪ なにやってんのー？」

「「ちょっと!? もういくの!？」」

他の二人の心配、動揺を他所に、水野は突っかかっている不良達に絡み始める。

「このおっさんがオレのズボンにビールぶちまけやがったからよー。ちょっとしたお仕置きみたいな奴だ」

「いやいやー、俺には真似出来ねえわー。恥ずかしすぎて♪」

「……なんだと？」

睨みつける不良の目など意にも介さず水野は軽く理由を話す。まるで映画の批評をするかのように。目の前に当事者がいるにもかかわらず。

「いや、だってさ？ わざわざ自分からぶつかりにいつて、そのままクリーニング代取ろうとするなんて傍から見たら完璧な当たり屋じゃん？ ばっかみてえ」

「て・め・え……！ 覚悟は出来てるんだろぅなあああああ！」

完膚なきまでに馬鹿にされた不良は怒鳴りながら立ち上がり、他の不良もつられるように立ち上がる。

「おう！ やっちまおうぜ！」

「はい」

「そこまで」

水野に殴りかかろうとした不良二人は、片方は炎の放ったBB弾で怯んだところを木野に蹴り飛ばされ、ほかのテーブルに勢いよく突っ込み、もう片方は、水野の突き出した携帯警棒が迫り、とっさに顔を防ぐ。

が、予想していた衝撃は来ず、不思議な顔をしながらガードを緩めると、容赦なく水野の拳が不良の顔面を殴りぬいた。

「があっ!？」

「弱っちいねえ。そんなんでよくカツアゲなんてしようと思ったね♪ お兄さん
びっくりだあ」

「リョー!？ シン!？ てめえ!」

「おっと」

切れた不良の一人が水野にナイフを突き出すが、水野はそれをひよいひよいとよ
け続ける。

「あああああああああああああああああああああ!」

「無駄無駄無駄無駄ー。WRYYYYYYYYY」

「がはっ」

不良はナイフを振り回し始めるが、適当に振られた警棒の一撃で気絶する。何と
も軟弱な、とは言い切れず、凄まじい快音を響かせて机に後頭部をぶつけたのだ。
気絶しないほうがおかしい。

「くそっ、それならあの二人だ! あいつらならまだあんな化け物みたいに強くな
いはず!」

「よし！あいつらを人質にとるぞ！」

「舐めんな」

「右に同じく」

「ほぐっ!？」

「ほげっ!？」

炎と木野を狙い不良二人が飛び掛かるが、炎に飛び掛かった不良は、部品などで結構な重量がある銃底で頭をチョップされ、木野に飛び掛かった不良はそのまま腕をつかまれ一本背負いを決められた。

「これにて一件落着！　って奴？」

「そうみたいだな」

「あ、オジサン、大丈夫ですか？」

水野がドヤ顔しながら告げた言葉に炎は辺りを見回して頷き、木野は被害者の中年男性に手を差し伸べる。

「あ、ああ。それにしても君たち、強いんだな」

「いえ。僕たち皆、SAGの新入隊員ですから。明日から出勤なんです」

「そうか……ってSAG!? SAG計画の防衛隊の隊員さんか! そりゃあ強いはずだ!」

「まあとりあえずオジサン、困ったことがあったらすぐ、俺たちに連絡もしくは通報してくれよ!」

水野は胸を張りながら被害者の中年男性にそう言った。宣伝のつもりかはよくわからないが。

「困ったときにすぐ駆けつける、それが正義の味方の条件、らしいからな」

「ああそうするよ。そうだ! 助けてくれた礼もしたい。何か好きなものを頼んでいってくれ!」

「え、マジで!? もらうもらう! ちょーもらう!」

「がつつくな! ったく、いっつもこーなんだからおまえはもー……」

「すいませーん、これとこれとこれとこれとこれ持ってきてください」

「意外な子がたくさん頼んでる!」

そして夜は更け……

「はい二日酔いー」

「気分悪いー」

「二人とも情けないよ？あれだけで」

「お前がほんとに不思議だわ」

一番食べて飲んでた木野が一番体調がいい事実二人は息を揃えて告げた。

「何処が？まだまだセーブしてたんだからね？」

「お前結構小柄なのになあ……」

「どこに入ってたんだよ……」

「魂に？」

「なにそれこわい。……ツと。ここが分かれ道か。ビルの中途中まで同じ道なのに

不思議な」

「じゃあ俺はこっちのアンデッツだな。じゃあまた後でな。水野、木野」

「じゃあ僕はこっちか。またね。光、敦士」

「んじゃーなー」

三人は別れてそれぞれの部隊の基地へと向かう。

「……ン?」

そして暫く歩いていると水野は床に落ちてゐる指輪を見つけた。不思議どころか奇妙だが、水野は迷わず近寄ってしゃがみこんだ。

「なんだこれ? 薄汚ねえな」

水野がその指輪を拾い上げると、その指輪には一つ一際輝く水の雫のような宝石に気が付く。

「なんだ……? この宝石……見たことねえんだけど……綺麗……いや、綺麗だな。奇妙だけど美しい。正にピッタリな言葉だな」

そう水野が得心いったように呟いた瞬間だった。

『ご挨拶だな。奇妙とは。地球人はみんなそう失礼なのか?』

指輪から声が聞こえてきたのは。

「いいっ!」

水野は反射的に指輪を投げ飛ばしながら後ずさる。

『何をする!』

「お前はなんなの!? 鉱物に取りついた幽霊!? 怪獣!? 異星人!」

『……異星人?』

「なんで疑問形イイイッ!？」

指輪の声は水野の上げた候補の中からひとつ該当しそうなものを疑問系で答え、水野は叫ぶ。あまりの事態にパニックになっていた。

『ああ、落ち着いて聞いてくれ。私の名前はウォータ。地球は狙われている!』

「……何お前、青木劉生?」

『誰だそれは。まあ、話を戻すぞ。この星はとある凶悪宇宙人に狙われている!だから私と契約して光の戦士になってよ!』

「やだよ!」

即答した。当然だが。

『何故だ!? 私は怪しい宇宙人などではないぞ!』

「怪しさ満点どころかフルカンだろうが!？」

『……こうすれば一緒に戦ってくれる人はすぐに見つかり知り合いの宇宙生命体が言っていたのだが』

「騙されてんぞそれ。思春期で夢を夢見る中学生だったらそれでも簡単に契約とれ

るだろうけどな、俺は生憎夢はもう叶っちゃってるし願い事も細やかなもの以外何にもない。自分で言うのもなんだが顔もいいし頭もいいし腕っぷしも強い」

『自画自賛だな』

誇らしげに自画自賛をしていた水野はウォータと名乗る指輪に遮られた途端、ホルスターから銃を抜き銃口に宝石部分を押し付ける。

「そういえば支給されたレーザーガンは金属だったらなんでも貫くとか……」

『わかった私が悪かった。その銃はしまおう。そこまで言うくらい自分の能力に自信を持っているのだろう？ どうだ、私と一緒に戦ってはくれないだろうか』

「……何でそこまで俺を誘おうと思うんだ？」

当然の疑問を告げる水野に、ウォータは少し間を置いて答えた。

『……君が一番最初に出会った私と話せる地球人だからだ。私はこの地球上では本来の力で活動できない。だが、地球人の力を借りれば……私は本来の力を発揮することが出来る』

「……それを信じてるって？ はっ、このネオフロンティアも終わって火星どころか木星まで活動範囲広げてる地球人にそんな本来の力だのなんだのと……」

『私は、過去に存在した巨人と同じくらいの力を持つ』

「……ハッ、それが……」

水野はウォータの告げた言葉に思わず迷った。憧れの存在と同じ力を、それを目の前にちらつかされたから。

『君が欲した。君が願った。だから私が現れた。それじゃ、不満か？』

「……大した悪徳商法だな」

『私が求める対価は命や財じゃない……『覚悟』。それだけだ』

「……わかったわかった。乗ってやろうじゃん。その話！」

『よし！それなら私の入ったこの指輪を指にはめてくれ！』

「おう！」

水野は右手の人差し指に指輪をはめ、力強く拳を握る。

『そしてリリカルマジカル……』

「そおい！」

『がっ!?!』

「ミッっ!?!」

『ウォーター』がとある危ない言葉を発しようとした瞬間、水野は全身のバネを使い、指輪をはめた右拳を全力で壁に叩き込む。……自分の手にも衝撃がかなり来ていたが。

『な、なにをするんだ』

「危ないんだよ！それは他作品！詩的で魔的な危険ワード発してんじやねえ！」
『作品とはいったい何のことだ!？』

「わかんねえんだったらもうそれでいいよ！」

水野はそう言い捨てるとそのまま右手を抑えながら自分の部隊の基地へと向かった。

「お前か！ 新入隊員の水野ってのは！」

「は、はあ……あなたは？」

「ああ、俺か？俺はこのストリームスの副隊長、青嶋（アオシマ）現（ウツツ）！これから一緒に戦う仲間だ！ よろしくな！」

「あ、はい。よろしくです」

青嶋と名乗った男は、手を差し出して笑う。

そして水野は差し出された手を取り、握手した。暑苦しい、というのが大半の印象だが。

「そういえば……隊長は誰なんですか？ 見渡してもオペレーター以外見当たらないんですが」

「ああ、瑠（リュウ）さんのことか。なあ水野。ここの部隊の存在意義はわかるか？」

「確か……特殊部隊のGUTSよりも各部門に特化したエキスパートを集め、さらに摩訶不思議な出来事に対する防衛力を強くするためのSAG（Save the expert Ability Guard）計画、通称サグ計画により設立されたこのSAGの偵察、捜査専門のチームがストリームスでしたっけ？」

水野が顎に指を当てながら答えると青嶋は力強く頷く。

「ああ。お手本通りの回答だ。まあ、瑠さん、瑠一蒼（ソウ）隊長は、有体に言えば、今あの人は任務に就いている」

「そうなんですか……」

「しかし、山の中の通報、恐らくだがアンデッツ、ガードナイツの新入隊員の出番も近いんだろうな」

「炎、木野の出番がそんなに早く……」

「おいおい、何他人事みたいに言っているんだ?」

「は?」

思いがけない言葉に水野は言葉を失う。ストリームスは偵察、捜査専門。そして今隊長が直々に動いているといった。だとすれば今水野の出番はないはずである。「お前も出るんだぞ。ストリームスにお前以上に戦闘機操縦適性のある人間はいない。戦闘適正なら瑠さんのほうが明らかに上のようだがな! しかしあの人は機械の類が苦手で……音声操作で動くようになっていないと使えない。おかしいんだ」

「は、はあ……でも、多分その瑠隊長もあなたには言われたくないと思います」

「む、中々に口が立つな。いいぞ! その歯に衣を着せぬその口、気に入った!」

「そこらへんがおかしいでしょって言うって気づかないかなあ!?!」

水野は全力で突っ込みながら机に置かれたパイロット用の手袋をはめた。

「なんだ、やる気満々じゃないか！」

「……一応、正義の味方になるためにここに入ったんで！」

その時、警報が鳴り響いた。

「……っ！ 水野！ 出撃だ！」

「了解！」

現の声を聴き、水野は格納庫へと駆ける。その目の中には、研ぎ澄まされた意志の光を宿して。

「……あれが……怪獣……」

水野は旋回性能、武器全体の貫通性能が特化したストリームス専用機『スクリュウイング』のキャノピー越しに怪獣の巨大な肉体を目の当たりにする。

「でかいし怖い……でも！」

水野は震える手を操縦桿を握りしめることにより落ち着かせる。

「逃げるわけには、いかねえな！」

水野は操縦桿を思い切り前へと倒し、急降下。怪獣の真上から強襲する。

「とにかく、市街部から怪獣を引き離さないとダメだな……よし!」

そして水野はトリガーを引きレーザーを発射。怪獣の頭部へと命中させ、操縦悍を手前へ力強く引く。そうすることにより機首を上へと降り、ペダルを踏んでブーストをかける。

「こっちだ! 化物!」

水野はキャノピーの中から聞こえるはずのない挑発をかけ、その場から離れる。
しかし、怪獣は気にも取らなかった。

「なッ!? 確かに命中させたら!」

水野は操縦悍を傾け急転換して怪獣の方へと向き直る。

「くそオオオオオオッ!」

雄叫びをあげながら攻撃するも、やはり効果無し。怪獣も流石に煩わしくなってきたのか、熱線を吐き、水野のスクリーニングへと熱線が向かう。

「ちいっ……反応しない!」

水野はそれを見てペダルを踏んで離脱しようとするが、急加減速を繰り返す荒い操縦に耐えきれなかったのか、反応が無くなり加速ができない状態へとなる。

「こんなところで、死んでたまるかあああ！」

その叫びに呼応するかのように光が回り、水野の目の前に真紅と銀の巨人と、翠と銀の巨人が水野を庇うように現れた。

「『シエアアウツ』」

「ウルトラ、マン？」

水野の眩きは虚空へと消え去り、二人の巨人は怪獣へと駆ける。

「ブオオオウ！」

「ジャッ！」

怪獣の熱戦を紅い巨人は防ぎながら光弾で怪獣を攻撃し、怪獣を怯ませる。

「ジェアッ」

そのまま緑の巨人のパンチがヒット。怪獣を大きくのけぞらせる。

「……おいおい。圧倒的過ぎやしないか」

『しないな』

「俺は必要あったのかよ。これを見る限り必要、ないだろ……」

水野は沈みながら呟く。だが、ウォータの一言が水野の身をこわばらせた。

『何を言っている。ヒートの契約者が、ウツドの契約者が。いくらすごかろうと奴に有効な攻撃は与えられないだろうな。まだ、覚悟も信念もない攻撃など、軽すぎる』

「は？」

その言葉と同時に紅い巨人と緑の巨人が怪獣の攻撃を諸に食らった。しかも、ダメージが重かったらしく、立とうとしてもその手を滑らせる。その胸の青いランプも、危機を示すように赤く点滅を始める。

「ブォウ！」

「ゼエァツ」

「ジャッ」

「なんだと!？」

水野の顔が驚愕に染まる。当たり前だ。これまで自分たちの世界を救ってきた存在が、目の前で呆気なく倒れようとしているのだから。

『どうした。地球人。戦わないのか!』

「……答える。ウォータ！俺が戦うには、どうすればいいんだ！」

し、右手で拳を握り、腰に添える。これが、ウォータの力を得た水野の戦闘の構え。覚悟、信念『正義』を表す構えだ。

『ゼエア!』

「ブオッ!？」

そのまま右拳を突き出し、怪獣の顎をとらえる。それを食らった怪獣も、思わず後ずさってしまう。

『ゼエアアッ!』

ウォータもまだ止まらない。覚悟を魅せる為、信念を通すまで。止まるわけがない。そのまま怪獣の前足、腕をとり、勢いよく投げ飛ばす。

《光線! 赤いのが撃ってたあれ、撃てないのか!?》

【君の思いを、形に変えろ! 心に念じるんだ、見えない刃を!】

《見えない、刃》

その言葉を聞いたウォータは右拳を胸のランプ、カラータイマーの前に動かす。

《親父が言っていた。見えない刃、それは、何もかもを、断つ力!》

『ゼエアアアアッ!』

その右拳は光を纏い、ウォータは叫びながらその光を纏った拳を突き出すと光線が発射され、怪獣をさらに大きく吹き飛ばし森林部に怪獣を飛ばす。

《ウォータ、応えろ！ 水は散る！ 覚悟は散らない！》

【光も散る！ だが、信念は決して自分を見失わない！】

ウォータは飛び、怪獣と自分との間から障害物を失くす。そして、左手で円を描くとそこに光の楕球が生まれる。

《【ウォータスプラッシュ！】》

そのままウォータが楕球に拳を撃ち込むと、そこから光が溢れ出し、水飛沫が散るように、水滴が跳ねるように。大量の光弾が怪獣を襲い、怪獣を、爆発させた。

《っふう。っ、そうだ！ 赤いのと緑のは！》

ウォータは思い出したように振り返る。そこには、もう飛び立っている紅い巨人と緑の巨人がいた。

《……大丈夫だったんだ》

【ああ。君が、救ったんだ】

《……よかったあゝっ》

ウォータは安心して胸を撫で下ろす。そこには確かな安堵と、守りきれたという達成感があつた。

《そうだ。お前らはどこから来たんだ?あのウルトラマンも別の星から来たんだろう?》

【流石に鋭いな。そう、私、ヒート、ウッドは、E44星雲の四聖の星からやってきた。絶交星人の魔の手から、地球を守るための、ウルトラフレンズとして!】

《ウルトラフレンズ?》

ウォータの中の水野が聞き返すと、それと同時にカラータイマーが点滅を始めた。

《うえっ!?!》

【時間がない、早く飛び立って変身を解くんだ!】

《そうだ、なんで飛び立たなきゃいけないんだ!この地にいるんだ、この地に住んでいるんだ!ここで解いてもいいだろう!》

【君は実験動物になりたいのか?この星の人間は、君のように善良な人間ばかりではない】

《……っ、わかったよ!》

そのままウォータは飛び立つが、それを地面から眺める女性が一人。

「また、新しいウルトラマンか。実に、30年ぶりだな」

その女性は水野と同じ制服を着、腰には銃とナイフを付け、結った黒髪は風に揺られ艶やかに煌く。その背に書いてある文字は「STREAMS RYU」。

「面白いことになりそうだ」

第二話 『正義と友情』

TPC特捜チームSAG^{サグ}に入隊した水野 光、炎 敦士、木野 裕樹の三人はそれぞれ部隊ストリームス、アンデッツ、ガードナイツに分かれ、所属することになった。

このうちの一人、水野は司令室へ向かう途中、奇妙な指輪を発見し、拾う。

しかしその指輪は異星人で、地球を守りに来たという。

助けを要求され、胡散臭さに水野は断ろうとするが、昔からの憧れ、【ウルトラマン】と同じ力を与えろと言われ、訝しみながらも引き受ける。

司令室へと向かい青嶋 現 副隊長へと挨拶し、とりとめのないことで話している最中に怪獣が出現。

それをストリームス専用機「スクリュウイング」で迎撃するも、兵装が怪獣に全く効かず、窮地に陥る。その時、二条の光と共に赤と緑の巨人が出現。水野の窮地を救う。

しかし、異星人【ウォータ】は二人の覚悟が足りないと告げ、実際に二人の巨人

は窮地に陥る。

それを見た水野は覚悟を決め、【ウォータ】と契約を交わし変身。信念、【正義】により凄まじい力を発揮したウォータは怪獣を撃破したのであった。

ウルトラフレンズ 第二話 『正義と友情』 炎熱怪獣 エンバリン 暴力子怪

獣 ボリウJr。 登場

「水野光。ただ今帰還しました」

水野は不時着（乗り捨てとも言う）したスクリーウィングをなんとか通常飛行ができるレベルにまで戻し、基地へと帰還していた。幸い、変身時にはブースターと通信機器が逝かれています追求されることもなかったが、その代わりに飛び立つための最低限の加速力のために必死で応急処置をする羽目になったことは余談である。

「おいこらてめえ」

「うえ？ うおっと!? 何!? いきなり!？」

水野はコックピットから飛び降りた瞬間に飛んできたスパナをキャッチすると、

飛んできた方向に吠えたと、そこにはニット帽のような作業帽、SAGのエンブレムが刺繍された作業着を着た童顔の青年が立っていた。

「隊長も副隊長も乗れねえから持て余してた戦闘機乗れるやつが出てきたと思った物を大事に扱わん馬鹿だったら、文句ぐらい言いたくもなるだろう」

「文句どころか殺意こもってましたけど!？」

水野はスパナを適当な方向に放り投げると、青年へと近づく。すると、拳が飛んできた。が、水野はそれを空手の回し受けの形で受け止める。

「モノを大事にしろっつってんだろうが……!」

「必要な時に必要なことをするのが俺のモットーでね。降りかかる火の粉は払わせて貰うぞ……?」

視線がぶつかり、火花が飛び散る。が、水野は早々に咳払いをすると、青年に背中を向ける。

「てめえ!」

「勘違いしてんじゃない」

しばらくの間歩くと、水野はスパナを拾う。

「すまんね。お前がハンマーとか投げてこようとしたらどうかと思って両手自由にしたかったのさ。ほれ」

水野は青年にスパナを手渡す。あっけらかんとした水野の言動に、青年は毒牙を抜かれた。

「……お前、意味分かんねえ」

「友達にもよく言われるよ」

「ハッ、そうかい」

青年はスパナを受け取ると腰についた工具ベルトに取り付け、右手を差し出す。

「え？」

「こっちも済まなかったな。俺は相田^{アイダ}咏^{ヨウ}。整備員だ」

「ああ、俺は水野光。ストリームスのパイロットだ」

水野はそう返すが手は取ろうとしない。なぜならば。

「なんで握手しようとしなんだ」

「油まみれの手とはちょっと」

最もである。戦闘機のパイロットという点を除けば、だが。

「……それもそっか」

「いや、ね？ 機械油が汚いってわけじゃなくてさ、ほら、ヌルヌルしてベトベトすんじゃない。いくら手袋つけてても、ねえ？」

「まあ、わかるが……」

腑に落ちないといった表情で相田は俯く。それを見た水野はなんとか場の雰囲気を変えようと話題を探す。幸い、話題はすぐに見つかった。

「なあ、スクリューウィングってさ、ついてるレーザー機銃の威力ってそんなに低いわけ？ 怪獣が気にも留めなかったんだけれど」

「何？ あれにはSーファランクスが積み込まれてるんだ、そんなわけないんだが」
ちなみに、Sーファランクスとは、旧GUTSのガッツウィング2号に搭載されていた“スバル砲”を小型軽量化し、複数を回転軸に取り付け、一つずつ回転させながら発射することにより驚異的な火力を誇り、回転させることにより放熱し熱暴走による機能停止を防ぐという優れ物である。毎秒34発放たれるそれは、分単位の火力で比較すれば、ガッツイーグルのトルネードバスターをも凌駕する。

え？ ネオマキシマは？ そんなものは地表で使い物にならないと判断します。

市街地の被害怖いし。使ってた？ ……知らんね。

「でもでも、実際にきにもとめなかったんだぜ？ 見てたなら知ってるでしょ」

「いいや。メカニックはあまり基地から離れたところの様子は見ることが出来ない。そんなの見てる暇があったら仕事しなきゃなんないんでな」

「じゃあ、ガンカメラとかで確認しといてよ。実際効いてないんだから」

「ガンカメラも逝かれてると思うけどな。ま、こういう報告があったって上に言っとくよ。でも、お前も報告しろよ？」

「わあってるって、相田」

水野のその言葉を聞いて、相田は満足したように頷き、スクリーニングの方へと駆けて行く。

《ガンカメラに変身する際の映像が残ってたらキミはモルモットなんだがな？》
いきなり頭の中に響いてきたウォータの声に水野は一切の動揺も無く答える。

「(大丈夫。ガンカメラは機首の先に取り付けられてる。変身する際の映像があったとして、映ってるのは青白い光。俺がその時ウルトラマンに助けられたとしか思われないさ)」

《意外と頭が回るんだな》

「まあね。……意外とつつった？」

「あつ、おおい！ 水野ー！」

「あつ、光！」

「んえっ、敦士、裕樹？」

頭の中でウォータとの話に集中していた水野はいきなり話しかけられて変な声を出しながら振り向いた。

「災難だったな、水野。初日からあんな強い怪獣に当たっちゃって」

「避難誘導ってあんなに大変なんだね。僕初めて知ったよ」

「ああ、ホントにな……？」

水野は炎と木野の体に巻かれた包帯に気付いた。

「おい、その怪我……」

水野が指を刺してその怪我を指摘しようとした瞬間、その指に填められた指輪、ウォータリングから甲高い音が鳴り響き始める。

「!?」

「ちょっ、いきなり……っ!？」

水野は慌てて指輪を押さえるが、その場にいた3人以外の隊員は不思議そうな目をしたものの、そのままだこかへと向かっていく。

「ど、どうということだ？ 水野、その、指輪……」

「っていうかその指輪、朝してなかったよね？ 拾いもの？ ネコババは、駄目だよ？」

《誤魔化す必要は無い》

「ッ、敦志、広樹、こっちっ」

水野は炎と木野の手を引き、男子トイレの中へと逃げ込む。

「ど、どうした？ さっきの声と関係あるのか？」

《アツシ。大丈夫だ。彼は青い巨人、ウルトラマンウォータの契約者だ》

「何？」

炎と木野が水野のほうを向くと、水野は所在無さ気に頭を掻いた。

「そういや、私達、って言ってたっけ」

《そういうことだ。彼らはそれぞれ私の仲間、ヒート、ウッドと契約を交してい

るらしい」

ウォータは指輪から一際強い光を放つと、虚空に自らの巨人としての姿を映し出した。それに倣って炎の腕に填められた腕輪、木野の首に掛けられたネックレスからも光が放たれ、炎の腕輪からは赤い巨人、木野の腕輪からは緑の巨人の姿が映し出される。

《私の名はウォータ。ミツルと契約したものだ》

《俺の名はヒート。アツシと契約したもの》

《自分の名はウッド。ヒロキと契約したものだよ》

虚空に映し出された青、赤、緑の光の三原色のラインの入った銀色の体の巨人がそれぞれの紹介を終えると、それぞれと契約した地球人は自らの名を名乗る。

「水野光。ウォータと契約した地球人だ」

「炎敦志。ヒートと契約した地球人だぜ」

「木野広樹。ウッドと契約した地球人」

三人が名乗り終わると同時に三体の巨人は虚空に消え失せた。

「な」

「ここにいたか」

水野が声のした背後に振り返ると凜とした雰囲気放つストリームスの隊員服に身を包んだ女性が立っていた。

「ちよつと!? ここ男子トイレだぞ!?」

「関係ないな。ちよつと来い」

「うおつとお!?」

女性は水野の襟元を掴み力任せに引き摺って行く。

「おい、アンタ、何者だ?」

「私か? 家名は瑠^{リュウ}で名は蒼^{ソウ}。ストリームスの隊長さ。アンデットとガードナイ

ツの新人君たち」

「え、あ、はい」

炎の問いに事も無げに答える瑠に木野は呆氣にとられて生返事をする、水野はそのまま多少暴れても一切緩まない手に抵抗を諦め、無抵抗のまま、どこかへと引き摺られていく。

炎、木野はそれをただ呆然と眺めていることしか出来なかった。

「うわった！」

「どうした、新人」

瑠の手から乱暴に投げられた水野は情けない声を上げながら受身を取り、辺りを見回す。

「ここは……？」

「先程の怪獣の住処だ」

瑠の言葉に水野は一瞬身を強張らせる。が、首を振ってその緊張をほぐすと、極めて平常心を装いながら瑠へと問う。

「あの、比較的低威力とはいえ、既存の兵器が効かなかった怪獣の住処？ どうやって」

「近隣住民の証言だ。まるで近所で有名な野生動物のように話しているのを聞いて私も最初は笑ったさ」

「あれを？ 豪胆ですね」

水野はそういつて笑うが、瑠は表情を緩めるどころか、更に強張らせる。

「いつもは穏やかで迷惑を掛けていたとわかると非常に人間に近い謝り方をしていたんだそう。動画まである。最新ファイル、再生開始。コード、24X3R6」
「……これが、あの？」

瑠が再生した動画を見ると、人間の言葉にぺこぺこ頭を下げる怪獣の姿が映し出された。確かに人間の話を理解し、友好的な関係を築いていたことが分かる。だが、水野が見て、戦ったあの怪獣がどうしても結びつかない。

「ああ。子供もいたらしくてな、人間ほどの背丈らしい。そんな怪獣が何故街を襲ったのか、分からないといった顔をしているな？」

「……」

瑠の言葉に水野はゆっくりと頷く。

「言葉が通じず、目にはどこか怯えがあったそう。まるで今までの信頼が全て崩れたように」

「人間不信……？」

「近隣住人はその怪獣の子供もおかしくなっていないか調べてくれ、といった内容の依頼、通報をしてきた。だからこそストーリームスの出番だ。が」

「怪獣は見つけ次第殺せ。近隣住人はあのままだと人間を襲うと説明する。喜べ新入り、怪獣初討伐の時間だ」

「アンタっ！」

瑠のその言い方に水野は怒り、掴みかかる。

「どうした。何か不満があるのか？ さっきはウルトラマンにスコアを取られたんだ。手当ては出んぞ？」

「あるに決まってる！ 俺は正義の味方を目指してここに入ったんだ！ まだ何もしてない怪獣をなんて、正義じゃあない！」

「正義などと不定形なものに踊らされるな新入り。ならお前は人をその怪獣の子供が襲わないと言い切れるのか？」

「それは……」

瑠の言葉に、水野は言葉を詰まらせる。無理も無い。よく躰けられた犬だって人を襲うことがあるのだ。毎日餌を与えていようともしうことはある。生態をよく知る動物でもそうなのだ。よく知らない怪獣相手に弁護するには些か材料が少なすぎる。

「これは私達ストリームスにとって極めて重要な事象でもある。危険を搜索し、事前に除去。それも私たちの大事な仕事だ」

「理屈は、分かりますけど」

水野がそういつてうつむくと、後ろからガサ、と木の葉が揺れる音が響く。

「新入り！」

「っ!？」

瑠の言葉に水野がその場を飛び退くと、そこに確かな破壊力を持った光弾が着弾する。その発射されたであろう方向を目で追うと、そこには先日の怪獣を人間大に縮め、角などを小さくしたような獣がいた。その目は、怯えや怒りが入り混じっているように震えていた。

「この子が……！」

「感情移入をしすぎるな、新入り。これは、駆除対象だ」

「とはいっても！」

「これは、ヒトなんて簡単に殺せるぞ？ 今だって気付かなければ、避けられなければ消し炭だ」

「くっ……」

瑠の言葉に水野は言い返せず、悔しさをこらえるように歯を食いしばる。そして少しの間を置いて、口を開いた。

「隊長」

「なんだ」

「腹は括りました。ですが、一つだけお願いしたいことが」

「言ってみろ」

「……この子は、俺の手で確実に仕留めます。だから、だからどうか、俺が死ぬまで、決して手を出さないでください……！」

水野はそういうとスクリーガンを引き抜く。どうしようも出来ない悔しさに涙すら浮かべているが、その声にもう、迷いはなかった。

さて、所は変わってSAGの基地の中。避難誘導中に瓦礫に巻き込まれたことになった二人は大事をとってということで休みとなり、喫茶室でコーヒーマーカーで淹れたコーヒーを嗜んでいた。実際避難誘導中にはぐれた子供を捜し、落ちてきた

瓦礫から二人がかりでその子供をかばったこと自体は事実で、その子供からの証言で労災が落ちることが決定している。しかし、そんなことよりも二人の心の中に浮かぶのは先ほどの戦いの内容だ。

マシントラブルで回避行動の出来なくなっていたストリームス隊員（スクリューウィング自体は複数いたので二人はこれが水野だと気付いていない）を助けられたのはいい。だが、怪獣自体には手も足も出ず、水野が変身したウルトラマン、ウォータが一人で片付けた。二人が契約したウルトラマン、【ヒート】、【ウッド】も水野が契約したウルトラマンと実力はあまり変わらないらしい。ならば、この違いはどこなのか。そればかりが脳裏に浮かんでは消えていた。

「あいつと、俺達、何が違うんだろうな」

「多分、才能。昔ッからそうだったでしょ？ サヴァンだかなんだか知らないけどさ」

「嫉妬なんて、らしくないぜ」

「違うさ。後悔だよ」

『そもそも。彼との違いは才能なんかではないのだけど』

炎は契約したウルトラマンの潜む腕輪から響く声に目を細める。

「あのな、正体をばらすなといったのは」

『俺たちの声は契約者以外には聞こえない。テレパスって奴だ。そっちも念じるだけでいい』

「（……ああ、そうかい）」

『そう、それでいい。そして、彼との違いだが。確固たる覚悟の違いだ』

「覚悟オ……?」

『そう、覚悟』

思わず口から漏れた言葉をヒートは肯定する。木野も興味深そうに耳を傾けていた。

『心の迷い、悩み。それは腕を鈍らせる。全力を発揮できないんだよ。俺たちはそもそもこの地球上においてその実力を発揮できないといったね。君たち地球人の力を借りないとそれは無理だと。故に、君たちのコンディションに俺たちの力は左右される。俺たちのコンディションは誤差にしかならないが、君たちのコンディションは誤差どころか勝敗を決する差にほど達するのさ』

「(それが、覚悟の差)」

ヒートの言葉に炎は水野の顔を思い浮かべる。へらへらしているけれど、その生まれから、厳しく教育されてきた男。生まれ持ったサヴァン症候群という特徴から不気味がられて寂しそうにしていた男。友達になったとき、あふれんばかりの笑顔で喜んでいた男。そして、誰よりも正義を愛し、悪をなすものに対する強烈なまでの怒り。それら全てを持って、自分は水野光という一人の人間を友として、同士として好きになったのだと考える。だからこそ、足手纏いにはなりたくない。だから。木野も思い浮かべる。サヴァン症候群だと、道場の生まれの堅物だと。そう呼ばれていた形容しがたい怪物のイメージを、一目見て会話を交わした瞬間打ち壊した優しい男。自分はそう力も頭もない。水野は当然、炎にも及ばない。樹のように広い器なんて自分には不相応。だけれど、水野と炎という人間の友達であるというのは一つの誇りにも思える。だから。

腹は括った。あとは、実践あるのみ。そんな中、怪獣出現の警報が鳴り響く。

「こんなすぐに……!!」

「敦士、行こう」

「……おう、やるしかない！」

そして二人は駆け出す。腕輪とピアスを煌かせて。

「グアオオオウ」

地中から現れた怪獣は雄たけびを上げるとビル群に熱線を吐き、ビルを次々と打ち壊していく。

「皆さんこっち！ 避難所はあちらです！」

緑色の制服を着たガードナイツと赤い制服を着たアンデッツの隊員たちが街の人々を避難誘導する中、炎と木野は現場に到着する。

「新人の!? 基地で休んでいるようにといったはずだ！」

指揮を執っていた赤い制服を羽織った男、アンデッツ隊長である藤烈士は二人の姿を見るとあわてて駆け寄る。

「人手はいくらあっても足りないでしょう!? 要救助者を探してきます！ 怪我をしているとはいえ、こんなの掠り傷だ！」

「無理はしません！ だからどうか！」

「……無茶は許さん！ 無事に戻ってくるように！ 特にガードの新人！ 何かあったらお前の所に文句を言われるのは俺なんだからな！」

藤の言葉に二人は無言で敬礼を返すと怪獣の居る方とは別の壊れたビル群に駆け出していく。そして藤はその二人の背中を見送ると静かに目を瞑ると無事であるようにと天に祈る。

そして二人は人気の無いところまでくると天を見上げる。赤いアンデッツの戦闘機、ブラドアローと緑色のガードナイツの戦闘機、スカイシルダー飛び交って怪獣に攻撃をしていた。多少は効いている様子を見せてはいるものの決定的なものはない。やはり従来の怪獣よりも強くなっているのだろう。炎は腕輪をつけた右腕を掲げ、木野は耳につけたピアスを弾いた。そして叫ぶ。

「ヒイイイト！」

「ウッドオオ！」

その叫びと共に二人の身体は光に変わり、炎は赤い巨人、【ヒート】に、木野は緑色の巨人、【ウッド】にその身を変え、光を天に放射しつつ巨大化する。

「さっきのウルトラマン……赤と緑か。青いのだったら安心なんだが」

避難誘導をしていた隊員の一人の言葉が容赦なく二人の耳に入る。さっきなんのいいところも無く負けてしまっていたからだろう。だからどうした。汚名返上名譽挽回。今度の戦いで見せ付けなければならない。ウルトラマンは、決して蒼の巨人、ウォータだけではないのだと。

ヒートは両手に拳を握り、左拳を胸前に、右拳を敵に突き出す構えをとる。これが炎の覚悟、信念『打倒』を示す構えだ。そしてウッドは両手を手刀の形にし、腰を落として軽く手を広げる『守護』の形。

ヒートは怪獣に素早く近寄ると下から怪獣の顎を右肘でかち上げる。

『ゼア！』

「グアウ!？」

その攻撃に思わず後ずさった怪獣はヒートに向き直り、その口から熱線を吐こうとするが、上空から放たれたウッドの光弾にそれを遮られる。

「さっきと動きが違う！　なんだ、さっきは緊張してたのかよ！」

「良いぞウルトラマン！　さあ、援護するぞお前ら！」

「了解！」

「空中支援が役目かなあ！」

『管制室よりパイロットへ！ 当然だろうが手え動かせ！』

追い討ちといわんばかりに地上からの隊員たちの携行武装、戦闘車両からのビームと戦闘機たちによる機銃の一斉射が容赦なく怪獣を襲う。それを見て、その声援を聞いて、二人は顔を見合わせ力強く頷くと必殺技の構えに入る。

『ゼアアアア』

『ジャアアア』

ヒートはカラータイマーにエネルギーを溜めると胸前に両手を合わせてエネルギーをそちらに移し、ウッドは大きく腕を広げると右腕にエネルギーを溜める。

「行けえウルトラマン！」

「がんばれえ！」

「怪獣止めるぞ！」

「了解！」

「パイロットより管制室へ！ 豪勢に行きたい！」

『管制室よりパイロットへ！ どんとやれ！』

避難民も合わさっての声援、地上戦力が脚に狙いを定めての攻撃、航空戦力のミサイルに怪獣は手足どころか口も動かせない。そんな中、二人の巨人のチャージが終わった。

《【ヒートウェーブ！】》

《【ウッドクラッシャー！】》

ヒートが腕を十字に合わせると赤い光線が交差した部分から発射され怪獣に突き刺さり、ウッドが右手を天に突き出すとそこから発射された光玉が放物線を描きながら段々と巨大化、上から怪獣を押しつぶす。そして完全に怪獣の姿が見えなくなった瞬間爆発し、跡形も無く吹き飛んだ。

「やればできるじゃん！」

「ありがとうウルトラマン！」

「ウルトラマンに敬礼！」

「はっ！」

「青いのは来なかったな」

『管制室よりパイロットへ、ピンチになれば来るんじゃないか？ それより直ち

に帰ってくるように』

街の人々や隊員たちの声が聞こえる。これは自分たちが守ったのだと、否応なしに自信が生まれる。心地よい達成感に包まれながら二人のウルトラマンは空へと飛び立ち、上空で光と変わり、地面に降り立ち地球人の姿に戻る。

「やったな、キノ」

「光に自慢してやろう、敦士」

そして辺りに要救助者がいないかを確認すると、二人は他のSAG隊員たちの下へ行くのだった。

そしてとある山中。そこには喉に穴を開け血を流して息絶えた怪獣と、銃を持ったまま怪獣の亡骸へと腰をかけ項垂れる水野の姿があった。

「後悔しているか？」

「……いいえ。いつかしくちやいけなかった決断を、今しただけに過ぎません」
瑠の問いに水野は棘のある言い方で顔を上げて答える。瑠はそんな水野の顔を見ると満足そうに頷いた。

「一端の戦士の顔になった。誰かを護るのなら、これくらいの決断は必要だ」

瑠は懷から鞘に入ったナイフを取り出すと水野へと差し出した。

「流石に刀は無理だが、これが私の餞別だ。天才剣士」

「……天才なんかじゃ、ありません」

水野は差し出されたナイフを受け取りながら、重々しく呟いた。

「ただ、腕の立つ両親から生まれて、厳しく教え込まれたに過ぎませんから」

「それで出来るから天才という。謙虚は美德ではあるが、過ぎれば嫌味だ」

瑠是水野の言葉にそう反論すると、こう付け加えた。

「大会を見たことがあるが、凡人のそれでは決してなかった。誇れ。それは強者の義務だ」

瑠はそれだけ言うとは自分勝手に山を降りていく。水野は残されたまま、ただ表情暗く俯いていた。

基本的には書きあがった次の日くらいに投稿することになりますのでいついつ何

時に投稿するとか決まっています。ご容赦を

第三話 『三位一体』

ストリームス隊長瑠 蒼に連れられウォータとなって倒した怪獣の住処にやってきた水野は以前は心優しかったという怪獣の変貌を知らされ、同じように変貌を遂げていた怪獣の子供を射殺する。そして炎、木野の二人は戦う理由、水野と友となった理由を思い出し、前の惨敗で失った名誉を挽回せんと短いスパンで現れた別の怪獣をウォータ抜ききの二人での退治に成功する。そして水野は、瑠から告げられた言葉に迷いが生まれていた。

ウルトラフレンズ 第三話 『三位一体』 絶交星人 ブリツ 巨人人形 ゼッ
コロイドW 登場

とある会議室。半球状の机の円弧側に、三人の人物が座っていた。

一人は青い制服を着た長髪の女性、ストリームス隊長『瑠 蒼』。一人は赤い制服を着た短髪の男性、アンデッド隊長『藤 列士』。そしてもう一人は緑色の制服を着た長髪の男性、ガードナイツ隊長『^{スガ}須賀 ^{ツユヒサ}露玖』だ。

とある一つの議題を話し合うために集まった3人は、調停役であり重役の一人が遅れているため他のことを話していた。

「しかし、瑠。随分新人にお熱じゃないか。惚れたか？」

「フン、惚れた腫れたじゃない。奴は学生時代中々筋の良い剣士でな。目をつけていた」

「瑠さん瑠さん、それ惚れた腫れたなのでは？」

「性別が違うだけですぐそう結びつけるな。青臭い学生じゃあるまいし。肝さえ据わっていれば跡を任せてもいいか、と思ったただけだ」

瑠の言葉に須賀は疑問を覚え、瑠へ問うた。

「あれ、青嶋君は」

「あれが管理職につける柄か。補佐当たりが丁度いいだろう」

「……適正でしか物を見てない」

須賀は瑠のキツパリ切った物言いに頭を抱えるが、瑠はそれを見て須賀の言いたいであろう言葉に先駆けて反論する。

「適正以外だけで物を見るよりかはマシだ。それに、5年10年は私もまだ引かん

よ。あれが十分に育ってから、だ」

「……まあ、少し調べただけでもわかる生まれだと、その筋は十分にアリだが」

「私は生まれではモノを見んぞ？　まあ、それが口実になるなら使わせてもらうがな」

クツクツと笑う瑠に、藤と須賀は苦笑すると、会議室に一人の老人が入ってきた。

「いやすまんね、道路が混んでて。しかし、邪魔したかの？」

「いえ、こちらでも話し始めたばかりでしたので。しかし、一つ言わせていただくと。このあたり渋滞の情報はいってきていませんが」

「……トイレじゃよ」

「何で嘘ついたんです」

瑠の呆れた声に老人は苦笑を返すと机の直線側の席へと座った。この老人こそTPCの重役でありSAG計画の立案者。ストリームス・アンデッド・ガードナイツを纏める『佐渡川^{サトガワ} 虫枝^{ムエ}』である。

「さて、君たちを呼んだのはほかでもない。【新しいウルトラマン達】の事だ」

「ええ。存じて。しかし呼称以外には特に話すことは無いように思えますが。地球

人類に敵対する意思は見えませんし」

藤の言葉に佐渡川は顎に蓄えた髭を撫でる。

「それはそうとは言い切れん。確かに過去現れたウルトラマンは地球人類の味方であった。だがそれはその正体が地球人類であったからこそ、だとわしは考える。過去の資料にも全て地球人類だったと記載されておるし。ティガ然り、英雄アスカのダイナ然り」

「しかし、正体を暴けばマサキ・ケイゴやゼルガノイド計画の二の舞の可能性があります」

「このまま正体不明のままじゃとキリエル人の可能性もある。疑わしいのはこうも短く怪獣が現れ、そのどちらをも【ウルトラマン】が現れ、退治したことじゃ」

「マッチポンプの可能性があると？」

「望むべくは心清き地球人類がウルトラマンであることじゃが……我々防衛隊は常に最悪の可能性を頭に秘めておらねばならん。他の凶悪な何かに地球が狙われつつそれに応えて3人現れただけでも知れんしの？」

「いきなり現れた存在に、心全てから信頼を置くなと」

「ま、そういうことじゃな」

佐渡川はそういつて区切ると心底楽しそうにフリップを取り出した。

「で、じゃ。ウルトラマンの名前なんじゃがああ必殺技のときの掛け声からとってじゃな、この青いのをウオータ、赤いのをヒート、緑のをクラッシュャーと」

「その流れだと緑のウッドでしょうが!？」

とあるマンションの一室、ベッドの近くのテーブルに置かれた目覚まし時計が鳴り響き、部屋の主が起きてそれを止める。

「……ねむ」

部屋の主は水野。ゆったりしたスラックスを上下そろえた寝巻きの袖で目をこすりながら洗面所に歩き、蛇口のレバーを上げて冷水を出し、手で汲んで顔にぱしやりと叩きつける。そうやって脳のスイッチを入れた水野はそのままに洗顔フォームを出して顔を荒い、洗い流してタオルで拭く。初出勤の時の色々なトラブル（戦闘機でマシントラブル・強制的に生身で怪獣討伐）に巻き込まれた結果、青嶋副隊長の鶴の一声により休日となっていた。他の二人も理由は違いが休みとなってい

た。

カーテンを開けると水野は日差しに思わず目を細める。

「……なにすっかなあ」

主な友人である二人は怪我で休みで誘うわけには行かず、他に友人もない水野は一人で街に出かけることにした。

シックな私服に着替え玄関でブーツを履く水野の背中には、妙に哀愁が漂っていた。

街で服や靴を見たり、店で適当なスイーツを買って頬張っていたりした水野はふと、街の異変に気付く。

やけに剣呑とした張り詰めた雰囲気。剣道の試合でよく感じていた場違いなそれに、水野は首を傾げる。

「なんで、こんな？」

何かが碎ける音が響き、水野は音がしたほうへと駆け出す。

路地裏へと駆け込むとそこでは喧嘩が起こっていた。片方が相手の顔を殴れば、

殴られたほうは落ちていたビンで殴った相手の頭を殴る。

段々とエスカレートしていき殺意すら見え始めたそれに、水野はあわてて割り込んだ。

「それ以上は駄目だ！ 死んじゃうぞ!!」

「うるさい！ そ、そうやって、あんたも一緒になって！」

「俺じゃない！ お前の方が！」

「何……!？」

割り込んで両方の顔を見て初めて気付く。これは、水野の大学の同期。それも、とても仲がいいことで有名だった二人。そして、その目に浮かんでいたのは以前倒した怪獣と同じ、怯えや怒り。揺れる瞳に釣られるように、水野の心も揺れる。

「……思い出した、お前、無感情の化物！ そんなのを呼ぶなんて！」

「だから！ おまえだろ!? こんな奴を呼んだのは！」

「ッ」

水野の脳裏にはこれまで受けてきた罵倒や、陰口が浮かぶ。『化物』、『何を考えているのかわからない』、『人外』、『七光り』。出会った人間にはほぼ確実に何かしら

の悪口を言われていた。ただ、勉強や剣道をがんばっていただけで。例外は家族と炎と木野。木野だって会って言葉を交わす前は偏見を持っていたことに気付いている。いくら親の真似をしても、顔を見て言葉を交わさなければその偏見は剥がせない。言葉を交わしたって、教師のプライドを気付かぬ内に傷つけていたのか、化物を見る目で見られていたこともある。だけど、だからといって、正義を為さない理由は無。わかってくれる家族が居る、わかってくれる友が居る。だからこそ、世界が平和であって欲しい。それを護るために、SAGに入隊したのだから。

「違う！ どちらに呼ばれたわけじゃない！ 喧嘩の音が聞こえた！ だからそれを止めに来た！ アンタら、仲が良かっただろう！ このままじゃ殺し合いになっていた、それはどちらにしたって後悔する！」

だから、と続けようとした瞬間、水野の後頭部に衝撃が走り、水野は地面に倒れ伏し、喧嘩をしていた二人は後ずさって逃げ出した。

「う、グ……」

「……フン」

水野に危害を加えたローブを羽織った下手人は踵を返して何処かへと去ってい

く。水野が立ち上がろうとしても手は滑り、そのまま意識は遠のいていく……

街の空にスクリーンに映し出されるように映像が浮かび上がる。そこに映っているのは先程水野を襲撃した下手人。無論、街の人々はそれを知る由も無く、空に映るそれにざわついていた。

『……地球人類に告ぐ』

フードを脱いだ下手人はその姿を表すと、声を発する。甲冑めいたその姿は明らかに地球人ではないことを示していた。

『絆などと嘯くものよ、友情だと嘯くものよ。全て我が前にひれ伏せ』

そして下手人が手を上げると宇宙より何かが落ち、落下地点を破壊する。

『我が名は絶交星人ブリツ。これは試しだ。弱いならば我が人形によって散るがい』

落下地点の煙が腫れ、落ちたその物体の姿を現す。その姿はカラーリングを全体的に暗くしたウルトラマンウォータそのものであった。その名は【ゼッコロイド】。絶交星人・ブリツの尖兵の機械人形である。

姿を見た瞬間、炎と木野の二人は自室から飛び出し、機械人形の元へと向かった。これは、明らかなる分断策。よく似た人形を地球で暴れさせ地球人類に危害を加えさせることによりウルトラマンである3人と地球を仲違いさせようとしている事はすぐにわかった。

だからこそ二人は走り、すぐにでもゼッコロイドを自分たちの手で倒そうとしているのである。

一番厄介なのは、『地球人類の手であの機械人形が倒されても向こうとしては何の問題もない』ことだろう。なぜならそれが完了した瞬間ウルトラマンウォータは敵なのか味方なのか、カラーリングを明るくしただけの機械人形かもしれない。そういう疑念が付きまとうようになる。まだウルトラマンウォータが一度しか現れていない、というのもこの疑念をわかせる原因だ。二人よりも遅れて現れたため、ヒートとウッドと別勢力だと捉えられてもおかしくはない。

この問題の解決策として最上なのは水野自身が現れて人々の前でウォータに変身し、機械人形ではないと明かすのが一番ではある。だが、来訪者であるウルトラフ

レンズたちがそれを許さない。まだ詳しく知っているわけではない、契約者が善人だからといって地球人類が全て善人なわけではない。それを明かせば絶対に利用しようとする輩が居るだろう。それも歴史に二人も前例が居る。ならば正体が明かせない、というのもっとものであるのだ。

では、その次に善い策はなんなのか。それは、ウォータ・ヒート・ウツドの3人で共闘してゼッコロイドを倒すことだ。ヒート・ウツドの二人だけで倒した場合やはり疑念は晴れない。ウォータが直接対峙しなければ意味がないのだ。

「ヒイイイトオ！」

「ウツドオオオ！」

炎と木野は変身して空へと飛び上がりながら巨大化する。水野と連絡を取ってからはしたかったが水野が携帯に出なかったため仕方なく二人で先に足止めすることにした。暴れさせるままでは駄目だから。二人もまた、人々を守るためにSAGに志願したのだから。

『——ツル！ ミツル！』

「——んん」

指輪から響く相棒ウォータの声に、水野は目を覚まし、後頭部の痛みに顔をしかめながらも起き上がる。

「……そうだ、あの二人は!？」

『キミが襲われた後、一目散に逃げて言ったよ。恐らく絶交星人に君が戦った怪獣同様に何かされていたのだろう』

「確かに、同じような表情を浮かべていたけど」

ウォータの言葉に先程の二人と先日戦った怪獣の姿を思い出す。

恐れ、怒り。恐怖感や憎悪を増幅させたとして、何に？ そんな水野の考えを読んだのか、それとも現れた故に説明する気になったのか。ウォータは説明する。

『奴は宇宙を渡り、社会を形成する知性的生命体を発見するとそれを滅ぼそうというのが目的の傍迷惑な奴だ。絶交星人というのも通り名で、奴自身の出身はわかりはしない。だが、社会に亀裂を入れることが生きがいであることは確かだ。奴が行う事は様々だが、それだけは決してブレない。だからこそ、止めなくてはならない』

「それを止めるために地球に来たのか」

『奴はある決まったパターンで宇宙を移動している。そのパターンの軌道上に目に付く社会的知性生命体が住む星を目的として来たんだ。まあ、こんなに早く到着するとは思わなかったがな』

「お前らが？」

『まさか』

水野がウォータに問うたその時、二人の居る場所が影に包まれる。そして水野が空を見上げると、大きなウルトラマンの顔があった。

『奴がさ』

「ッ——！？ ウォータァァ！」

水野は冷や汗を垂らしながら拳を掲げて叫び、変身する。光を放ちながら巨大化し、その勢いのままウルトラマンの顎にアッパーを入れる。

危険を感じてのことだったが、ウォータに変身した水野はすぐに間違いではないことを悟る。その姿は、ウルトラマンに変身した自分と瓜二つであったからだ。

《なんだ、こいつは……！？》

【ゼッコロイド。奴の尖兵。成程、どうやら奴も何度か邪魔されてよほど腹に据え

かねたらしい。私に似た人形を作って仲違いさせようとは】

《偽者暴れさせて信頼なくそうってか……！！》

『ゼエア！』

ウォータは構えをとるとゼッコロイドへと近づき、右ストレートや左のジャブを織り交ぜたコンビネーションを放つ。それを受け止めることもせず、ゼッコロイドは段々と後ずさっていく。

《今だ！》

『ゼエエア！』

今までよりも大きくゼッコロイドがよろめいたその瞬間、大きく振りかぶったパンチを放つ。が、ゼッコロイドはそれを掌で軽く受け止めた。

『ゼア！？』

「PPP…」

ゼッコロイドは電子音を発しながらウォータの拳を捻り上げ、ウォータは苦悶の声を発する。が、何処からともなく赤と緑の2条の光線がゼッコロイドに突き刺さり、ウォータを開放する。

《無事か、ミズノ!?》

《あんまり油断しないようにってお父さんに鍛えられたんじゃない?》

《その声は、炎に、木野!? おい、大丈夫なのか!? お前ら怪我してたら、軽くない奴!》

テレパシーで聞こえてきた二人の声に、先日見た二人の姿を思い出して水野は心配そうに問うと、ウォータの両隣に降り立った二人は構えを取りながら力強く応える。

《ハッ! あの程度、一晚寝れば直る!》

《そんなことより強敵だ。3人の力を合わせるよ!》

《そっか、そうだな……!》

二人の心強い言葉に水野は心の中で強く笑って、不安を振り切って構える。

『ゼエア!』

『シュア!』

『ジャッ!』

三人のウルトラマンは掛け声を上げると両翼の二人はそれぞれの方向に分かれ、

まずウォータがゼッコロイドとがっぷり四つ組み合った。

『ゼエアア……!』

「PPP…」

その結果がら空きとなっているゼッコロイドの背後から二人がかりで羽交い絞めにして、ウォータが腹部にパンチを入れると、ウォータはバク転してその場を離れると、ゼッコロイドは目からビームを放ち、ウォータが先程まで居た場所を撃ち抜く。ゼッコロイドは羽交い絞めをしている二人を振り払うと真っ直ぐウォータの方へと向かうが、そこには光の楕球を創り、構えたウォータの姿があった。

《【ウォータスプラッシュ!】》

放たれた無数の光弾はゼッコロイドへと襲い掛かり、大量の煙を巻き上げる。しかし、煙が晴れた後も、そこには防御姿勢をとり無傷のゼッコロイドの姿があった。

《チッ、硬えな》

《三方向から飽和攻撃を仕掛けるか?》

《いや、僕の技はそれに向かない。あの大量の講談を受けてあれだ。あまり効果があるとは考え辛い》

【丁度いい。私達の本当の力を発揮する 때가 来た】

【俺たちが《ウルトラフレンズ》と名乗る理由。そして3人でこの地球へと降り立った理由】

【それを今、あなたたちへと教えよう……！】

ヒートとウッドが炎と木野の意思を全く反映せずに両手を突き出すように構えると、その手の先からそれぞれの色のビームが発射され、ウォータの胸のカラータイマーに突き刺さる。

《いっ!?!》

《お、おいヒート!?! これ、大丈夫なんだろうな!?!》

《無事ですすまなかったらただじゃ……!!》

【これは俺たちの奥の手】

【三位一体の必殺技】

予想外の出来事に慌てる水野に炎は慄き、木野はもしも何かあったらと怒りを顕にする。が、ヒート、ウッドは事もなげに応える。

【念じろ、ミッル。ここに渦巻く3つの力、それを纏め上げて発射しろ】

「ん？ あれ、大学の」

「同期、だねえ？ 僕たちとはあまり関係ないはずだけど」

近くに來た二人は炎と木野の疑問の声には目もくれず、水野へと全力で頭を下げ
る。

「この間は、ゴメン！」

いきなりの事に訳もわからずきょんとする炎と木野を横目に、二人は謝罪の言
葉を重ねていく。

「勝手に喧嘩してて、止める義理もなかったのに止めようとしてくれて」

「説得しようとしてたのに、聞かないで。あのままじゃお前の言うとおり、どっ
ちかが死んで、後悔してた。今でもこいつと殴り合って、後悔してるんだ」

「だから、ゴメン！」

「……」

二人の謝罪の言葉に水野は困ったように他所を見ながら頬を掻くと、二人を見直
して微笑んだ。

「いいよ、許す。じゃ、ここの会計お願いね？」

「ああ、これだけで許してくれるとも思えないけど」

「結果的には見捨ててしまったわけだし」

「良いの、良いの」

そういうと水野は炎と木野を促して3人で席を立ち、別の場所へと歩いていく。

「しかし、光」

「なんだよ、木野」

「割と怒ってない？ あの二人に」

「なんでさ」

「いや、あの会計、僕がわりと食べた後」

木野の言葉を人差し指で遮ると水野は舌を出していたずらっぽく笑う。

「ま、後頭部殴られた侘びって事で♪」

空は青く、全ての人々を照らしている。

まだ最終回じゃないです。

ウルトラフレンズ

著者 水川リョウト

発行日 2019 年 8 月 3 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/116720/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
